

## 長春の梶村秀樹先生

金 泰 相

いま私の前には一枚の先生の写真が置かれている。先生の突然の逝去から受けたショックは今も私の心の底から消え去らない。先生は余りにも速くこの世を去った。先生にやっていただきたい仕事は余りにも多く残っている。先生の「在天の靈」にしても何とも無念であったであろう。ただ痛惜という言葉だけではどうにも言い表せない心情である。

いまから思えばどちらかと言うと先生のお体は弱い方であった。今年の正月、私は先生に年賀状を送ったことがあるが、先生からも折返し年賀が届いた。そこには先生ご自身が病床の中で描いたと思われる一輪の可憐な野花が描かれていた。今にして考えればそれは又、一見弱々しいように見えても、風雨に耐えながら大自然の中で誇らしく強く生きていく野花の性格の中に先生の一生が象徴されているように思われてならない。

先生と私の出会いは四年前の一九八五年に溯る。当時私は宮崎義一先生のお世話で一ヶ月間、東京の岡三証券経済研究所の招待で日本に滞在したことがあるが、或る日のこと宮崎先生に伴われて神奈川大学を訪問することになった。それが、先生と私の邂逅になった。その後二年を経て私は富岡倍雄先生と梶村秀樹先生の取り計らいで日本学術振興会の招聘を受け、十ヶ月間神奈川大学経済学部の客員研究員としていたことになった。其の間、同大学各国経済研究

室の中村、富岡、大林、後藤等の諸先生方にはいろいろ教えも受け厄介にもなったのであるが、とりわけ梶村先生には生活の面まで含めて貸家を捜していただくやら、滞在の手続きまでして貰うやら並々ならぬお世話になった。いまでも心から深く感謝している。

昨年二月、十ヶ月の日程を終えた私は帰国することになった。その際一応神奈川大学との共同研究を終えるに当たって、同大学経済貿易研究所長の清水嘉治先生から日中学术交流の行事として、同研究所から訪中學術代表団を派遣したいが、どうかとの相談を受けた。私は早速その旨を中国側の吉林省社会科学院に伝え結局代表団の受け入れが、決まった。著名な経済学者清水嘉治教授を団長とする四人の代表団の中には梶村先生も加わっておられた。

代表団は予定通り四月二十九日成田出発、同日午後には無事北京に着き、夜は北京では日本人旅行者にお馴染みのホテル「民族飯店」に一泊、翌四月三十日一行は北京を離れ、空路で北の都市長春に向かった。長春はその昔、日本統治のいわゆる「満洲国」時代には国都新京と呼ばれていたところであるが、いまでも当時の関東軍司令部庁舎等の旧跡が残っており、日本でも戦中派の人ならばその名は聞いて知っている筈の町である。長春の空港には私が迎えに出た。その時はちょうど季節風の蒙古あらしが吹くところで、その日も風は強い方だったが、一行は元氣な姿を見せていた。当日夜は吉林省社会科学院の歓迎宴があった。こうして梶村先生を含む同代表団の長春における訪中學術行が始まったのである。

同代表団諸先生の長春における講演は二回に亘って行なわれたが、清水団長と梶村先生は吉林省社会科学院で、海道勝稔教授と池上和夫教授は中国での名門校の一つである吉林大学国際経済学部でそれぞれ内容豊かな充実した講演をされた。講演は成功裡に終り、中国側聴衆に深い感銘を与えた。梶村先生の講演は「日本企業の海外進出動向と中国への関心」というテーマであったが、それは実際に即したものであり、それが故に又説得力に富んでいた。

代表団の長春滞在は五日間であったが、日程はハード・スケジュールで先生方の体に相当こたえたものと思っ  
る。梶村先生も忙しくあっちこっちを飛び廻った。先生のご要望により、私は先生を「長春市朝鮮族書店」に案内し  
た。中国には中国に国籍を持つ朝鮮族が百七十万程いるが、その職業は多方面に亙り、大学の先生や学者、そして政  
府関係の要職にも朝鮮族の人は少なくない。このような背景で朝鮮語による出版物もかなり出されている。私は先生  
が日本における近代朝鮮史研究の権威であるばかりでなく、社会的活動も活発になされており、特に在日朝鮮人・韓  
国人問題のためにも、困難な環境の中で人権擁護の精力的な活動を続けておられることを知っていた。それは言うの  
は易しいが、いざ実行するとなると誰にでも出来るというものではない。それがために先生の蒙ったマイナスの面も  
さぞかし多かったことであろう。誠に敬服に堪えない。話しは横にそれたが、幸いに先生が入手を希望していた本が、  
何冊か見つかり、ほっとした気持ちで私達は店を出た。長春、瀋陽、そして北京でも先生のご夫人の専門である中国  
文学の本を求めて先生と一緒に方々探し歩いたのを覚えている。

去年の二月、私が日本に滞在していたころの事であるが、先生は資料収集のためこちらの延辺朝鮮族自治州への長  
期滞在を希望しておられた。余り急ぐことではないと言われたので帰ってから直ぐには連絡を付けなかったが、その  
後先生が病床にいらることを知り、少しでも先生に病氣療養上の励ましになって貰いたい考えで早速延辺大学にいる友  
人を通じて依頼した結果、受け入れ承諾の通知が届いた。私は直ぐその旨を先生に伝え、先生が全快した暁には私が  
直接延辺まで先生のお供をすると言いつ添えた。ところが不幸なことにこの手紙を発送して何日も経たない或日、私は  
先生の訃報を受け取ったのである。青天の霹靂とはまさにこういうことを指して言うのかも知れない。先生は生前に  
とうとう私からの朗報を受け取らず終いになったのである。ただ残念というほか言い様がない。

先生は逝った。風の如く去って終った。ただ人々の心の中に何時になっても消えない限りない愛惜の情だけを残して。

(きんたいそう・中国吉林省社会科学院日本研究所長、教授)